

# かさまのれきし

第89回

## はしか 麻疹の流行（下）

疫病に苦しむ村々は祭りを盛大にして病魔を祓おうとしましたが、感染予防という意識はなかったようです。文化九年（一八一二）一月、笠間藩領内に疱瘡の患者が出る人々が大勢集まって、朝から晩まで大杉囃子（稲敷市大杉神社から広まった疫病退散のお囃子）を演奏し、人々には食事や酒肴が振る舞われました。藩は、農業の妨げになることを理由にこれらを禁止しました。



田中友三郎彰徳碑

文政元年（一八一八）、上箱田村に疫病が流行り、藩は疫病退散の祈禱料を村に支給しました。六月になると村は天王祭（祇園祭）を社で行う居祭から出社祭（神輿が社を出て村内を廻る形式か）に変更したいと申し出ましたが、藩は許可しませんでした。また、文政三年三月には来栖村の「村方小前」たちは新しい天王神輿を祭りで使うと主張し、神主が藩の神社奉行に願書を出しましたが、藩はこれも許可しませんでした。一度許可すると多くの村々が次々と申請してくることを恐れたためです注①。

「村方小前」とは大百姓でもなく名主・組頭といった村役人層でもない村の百姓たち（小前）のことです。藩政改革が進むと村々の戸数と人口がゆつくりと増え始めました注②。増えた原因は稲田の西念寺が中心となって担った北陸地方からの入百姓政策と藩が行った地元農家の次三男による分家政策とありました。この結果、荒れていた田畑が次第に復興されていくと、大百姓のなかには経営が苦しくなる者が現れました。奉公人（使用人）として働いてくれる「小前」がもう集まらなくなったからです。農村復興の担い手になった「小前」たちは、自分たちの要望をはっきりと主張するようにになりました。来栖村の天王神輿の願書も彼らの強い要望に押された村役人が書いたものでした。「小前」たちの意向を無視しては復興も村政も祭りも進まなくなってきたのです。

江戸時代最後の大流行は文久二年（一八六二）でし

た。長崎出島から始まったとされるこの大流行は重症化しやすく死者が多かったといわれ注③、江戸でも多くの死者がでました。笠間の様子はよく分かっています。この最中に笠間で精力的に働いていた人物が美濃（岐阜県）出身の田中友三郎（一八三九～一九一三）でした注④。江戸の陶器商であった友三郎は手越・宍戸・石井・箱田等の産地を廻り、各窯元の製品を六十両余で買い占めて江戸に送りました。笠間に来たのは、江戸で麻疹の薬を煎じる土瓶が爆発的に売れ、在庫切れとなったことがきっかけでした。そこで、品質に問題がなく価格の安い土瓶や陶器を江戸に近い産地から新しく仕入れようと思いい、水戸を経て笠間にやってきました。笠間産の土瓶や陶器類を江戸に運ぶとすぐ完売したので、再び笠間に仕入れに来ようとしていたところ麻疹に倒れました。幸いに症状が軽く、一か月もかからず全快し、まもなく大流行も終わりました。文久三年、友三郎二十五歳のことでした。その後の友三郎は明治二年（一八六九）、江戸から笠間に引っ越し、石井に住んで、笠間焼の発展に力を振っていました。「宍戸焼」、「箱田焼」などという区分けで呼ばれていた陶器を「笠間焼」に統一したのは友三郎だといわれています。麻疹がつかないで縁で笠間に来たともいえます。

（市史研究員 深谷 祐）

注①②…手塚多助編『十五年來眼目集』

注③…鈴木則子『江戸時代の流行り病』

注④…『陶器製造販売人田中友三郎氏経歴』